

The SWADOM

インドスタディーツアー報告書



〈スラムの子供たちと共に記念写真〉
2014年9月7日撮影

目次

- 1.概要 (団体概要、ツアーの目的、ツアースケジュール、参加メンバー)
- 2.スラム訪問
- 3.日系企業訪問 (パナソニック、マルチ・スズキ)
- 4.政府機関訪問 (インド外務省、日本大使館)
- 5.トリパティ夫人との夕食会
- 6.インド人学生とのディスカッション
- 7.観光-アグラ、バラナシ-
- 8.まとめ

1. 概要

■ 団体概要

The SWADOM (大阪大学学生国際問題研究会) は、大阪大学の有志による学生団体で、2014年10月現在で8名の現役学生が所属しています。2011年12月の発足以来、学生による勉強会や、大使をお招きした講演会運営などを行っており、国際問題への関心を高め、自らの意見を発信できる人材になることを目指し、日々活動を続けています。今回は団体活動の一環として、インドへのスタディーツアーを企画しました。

■ ツアーの目的

「飾られていないインドの現状を多角的に捉え、将来の日印関係・自分自身の成長に活かす」ことが本スタディーツアーの目的でした。日本国内で、どれほど机の上で勉強したところで、インドの本当の現状を理解することは出来ません。また、我々が日本で知りうるインドの方々は、インド社会のごく一部の層でしかありません。実際にインドに行き、様々な立場の方と触れ合うことで、飾られていないインドの現状が少しでも垣間見られたら、と考え、スタディーツアーを行いました。多角的に見るために、スラム、日系企業、政府機関、学生とのディスカッションという4つのコンテンツを用意しました。

■ ツアースケジュール

日程	内容	日程	内容
9月6日(土)	関西国際空港 発	9月16日(火)	観光 (ガート等)
	デリー国際空港 着	9月17日(水)	ベナレス空港 発
9月7日(日)	デリーのスラム訪問		ムンバイ空港 発
	デリー観光 (フマユーン廟 等)		デリー国際空港 発
9月8日(月)	パナソニック ジャジャール工場訪問	9月18日(木)	関西国際空港 着
9月9日(火)	マルチ・スズキ マネサール工場訪問		
9月10日(水)	インド外務省訪問		
	在インド日本国大使館訪問		
9月11日(木)	観光 (オールドデリー)		
9月12日(金)	観光 (デリー周辺)		
	トリパティ夫人と夕食		
9月13日(土)	インド人学生とディスカッション		
9月14日(日)	観光 (アーグラ)		
9月15日(月)	デリー空港 発		
	ベナレス空港 着		

■参加メンバー

水谷 亜香里〔代表〕(大阪大学 法学部 国際公共政策学科4年)
井上 ゆり絵〔副代表〕(大阪大学 法学部 国際公共政策学科4年)
山下 渉(大阪大学大学院 国際公共政策研究科 博士後期課程3年)
藤井 勇太(大阪大学 外国語学部 外国語学科 中国語専攻5年)
木嶋 優斗(大阪大学 外国語学部 外国語学科 ポルトガル語専攻3年)
北條 真莉紗(大阪大学 法学部 国際公共政策学科2年)

【計6名】

2.スラム訪問

文責:北條 真莉紗

■スラム訪問までの経緯

今回のスラム訪問が正式に決まったのは、スタディーツアー出発直前でした。様々な方にコンタクトを取る中で、インターネット上でスラムへのツアーを見つけました。ツアーを主催・同行してくださったのはNGO団体のPETE(Provide Education To Everyone)で、デリーのスラムに3つの学校を建てて運営されています。主に男子が通う小学校や、主に女子が通うアートや裁縫・民芸品製作の専門学校、幼稚園があります。

■当日の様子

当日は、初めにPETEのオフィスに集合し、スラムで支援を行っている女性にスラム内を案内していただきました。スラムの入り口は小型自動車がかろうじて通れる程度の細い路地で、道の両幅には家屋や商店が立ち並んでいました。印象的だったのは、家の壁が鮮やかにペイントされており、明るい雰囲気を感じたことです。スラムに住んでいる子供たちは非常に人懐っこく、「Your name?」と英語で訪ねながら握手を

求められました。まるで選挙運動のように、この日だけで50人近い子供たちと握手をかわしました。日本だと、一般的に貧困というと暗いイメージがありますが、ここでは貧しさや苦しさも明るいエネルギーで吹き飛ばそうとしているような若々しさが全体から感じられました。



訪問したのは日曜日だったため、学校の見学は出来ませんでしたが、専門学校に通っている女の子たちと会うことが出来ました。インドのヘナを施してもらったり、彼女らが製作したアクセサリを購入したりしました。専門学校からは、アーティストとして海外へ出る人たちも多いという話も伺いました。親の代から技能を受け継いでいる人たちも多く、自分の専門分野に対しての強いプロ意識が感じられました。

その後は、インドの伝統的な人形劇の講演を見させていただきました。兄弟二人で講演を行っており、手先を器用に使って糸で吊るされた人形を操る、まさに職人技の芸でした。バックミュージックは簡易の笛と太鼓だけでも関わらず、力強い音が部屋中に響き、大迫力の講演でした。彼らは伝統的な人形劇だけでなく、子供たちへの環境教育として教育劇も行っているそうです。

■考察

今回訪問したスラムは6.5エーカーにも及ぶ大きさで、全ての場所が均質なレベルの生活をしているとは言い難い状態でした。もちろんインフラ面ではどこも下水道が整っておらず、電気の普及率は極めて低く、部屋の暮らしも決して裕福とはいえないものでした。ただ、あるエリアでは家庭にテレビがあったり、ベッドが大きかったり、子供達も比較的きれいな服を着ていたりしました。一方で、子供は下着以上の服を着ておらず、劣悪な水を使用しているためか髪の毛が変色している子供が多く見られるエリアもありました。おそらく前者のエリアは、我々のような観光客の訪問に応じることで一定程度の収益を得る「ビジネス化」がすすんだ場所となっているが、後者にはその恩恵がまだまだ及んでいないのではないかと考えています。私たちのように、インドにあるスラムを訪れ、学びたいと考える学生は世界中に多く、そういった人々に対して質の高いツアーを提供し、代金として支払われたお金をスラムに還元するビジネスの形はまさしくWIN-WINであり、生活をより豊かにする有効な方法だと感心させられました。

同時に今回の訪問を通して、貧困という問題の解決の難しさを強く感じました。無計画に作られたそれぞれの家(部屋)・通路、それに付随して未整備のインフラ、その一方で言語や宗教、出身地によって徹底して住み分けられた成熟したコミュニティ。どこから手をつければ、根本的な解決になるのか、また彼らの生活の質が向上するのか、今回の訪問だけでは見つけることができませんでした。ただ一方で、子供達が私達に見せた歓迎の笑顔はどこか希望や優しさに満ちており、日本人として、そしてスラムを訪問した者として、これからどういう支援を行っていく必要があるのか、それぞれが考えていかなければならないと感じた一日でした。



3. 日系企業訪問

文責：藤井 勇太

■訪問の経緯

今回のスタディーツアーのテーマである「インドを多角的に捉える」ためには、インド人を理解することが不可欠で、その中でも彼らがどのように働いているのかを知ることは非常に意味があることだと思い、企業訪問を企画しました。今回は「日系」企業、特にコンシューマー向けのメーカーに絞ることにより、日本の商品がインドにどのように受け入れられているのか、そしてインドビジネスの難しさや今後の展望について学ぶことができました。

今回訪問したパナソニック・マルチスズキはインド商工会議所よりご紹介いただき、我々と面識がないにも関わらず、両企業とも訪問を快諾していただきました。この場をおかりして、両企業に再度感謝申し上げます。

■訪問1 パナソニック

9月8日、デリー到着3日目に、パナソニック・テクノパーク工場を訪問しました。ハリヤナ州ジャジュールにある同工場は、インドの新拠点として2012年に完成し、現在洗濯機・エアコン・溶接機を製造しています。

まず始めに、インド人スタッフ2名から、パナソニックのインド進出や工場に関する紹介を受け、その後、日本人社員の方に質疑応答をしていただきました。事前にパナソニックのインド進出状況を調査し、勉強会を行ったため、この場で一人一人が疑問に思っていたことを伺うことが出来ました。1時間弱話す中で、インドにおける家電市場の苦悩がひしひしと伝わってきました。特に印象的だったのが、韓国企業や国産企業とシェアを争う中でパナソニックという日本企業の価値をどこにおくのか、というお話でした。インドのボリュームゾーンはまだ家電を買える状況になく、洗濯機やエアコンの普及率が約4%という中では、性能よりも価格によって売上げが左右されるのは明確です。当然、価格競争の中でコストを下げる必要はありますが、その中で何を妥協して何を守るのか。今の利益を追い求めるのではなく中長期的な目線でいつ投資していくのか。以上の抽象的なことを、分かりやすく具体的に説明して頂きました。

工場見学では、実際にどのような環境下で製品がつくられ、インド人が働いているのかを重点的に見学し、引率のインド人社員の方に疑問に思っていることを適宜質問しました。筆者は就職活動中、何度かメーカーの工場を見学したことがありますが、パナソニックの工場は日本と比較しても遜色ないほど清潔で整理されていました。インドではいまだに人件費が低いにも関わらず、ほとんどの場所で機械化がすすめられており、従業員数も必要最低限といった程度でした。この意図を伺



うと、中長期的な目線で考え効率を重視しているとのことでした。従業員の教育にも非常に力をいれており、【safety】【quality】【procedure】を契約社員も含め、全ての従業員に徹底して教育しているため、非常に真面目に仕事が行われていました。

最後に再度、同窓の先輩社員と人事の方に質疑応答をして頂き、ここでは、インド人の「管理」、特に採用の仕方についてのお話を伺いました。インド人は、集団をつくりやすい性質があり、労働争議がおこりやすい国柄です。そのため、パナソニックでは現地人スタッフに採用を任せ、各地域出身者を幅広く採用することに努めているそうです。優秀な人材を獲得するためのヘッドハンティングも積極的に行っているそうです。その際、単純に給料をつりあげるのではなく、しっかりと「ポスト」を与えることで、従業員にやりがいをもたせるそうです。「日本流」のよさを教育によってインド人に徹底する一方で、「インド流」を理解し、現地のやり方にも適応していく。そして、インドにパナソニック製品を根付かせる過程で、働きやすい環境を整えていく。インドをビジネスの場だけでなく、幅広い角度からとらえる日本のリーディングカンパニーらしさが様々なところから伝わってくる工場見学となりました。



■訪問2 マルチ・スズキ

9月9日、パナソニック訪問の翌日に、マルチ・スズキ・マネサール工場を訪問しました。同工場は、ハリヤナ州にあり、インドの生産拠点としては2番目で、SWIFTなどを生産しています。

まず始めに、3名の日本人社員の方々より、マルチ・スズキの沿革から工場内の工程までを説明していただきました。インドの自動車産業の始まりは、インディラ・ガンディー元首相の次男のサンジャイ・ガンディー氏の「国民車構想」という意志を受け継いでマルチ・リミテッドという会社が設立されたことでした。その合弁相手を選ぶコンペティションの存在をパキスタン出張中のスズキ社員が偶然見つけたときには締切りが過ぎていました。しかし、鈴木修会長が辣腕を振るって候補に入り、ルノーや三菱自動車などと競合して見事、合弁相手の権利を勝ち取った話に、ドラマを感じました。その後のマルチ 800 の爆発的なヒットが、今のマルチ・スズキのインドにおける絶対的な地位に繋がっています。



工場見学では、プレス、溶接、組立の過程を見学させていただきました。パナソニック同様、かなり機械化がすすんでおり、工場内の労働者数も決して多くはありませんでした。また、工場を横に細長く建設し、一方から他方へ流す過程で1台の車を組み立てていくのですが、縦幅は短くし、工場内で部品が最短距離で届けられるように作業効率をあげる工夫がされていました。日本の産業用機械が海外でもしっかりと活躍しているのはとてもうれしかったです。精度を求められる工程では値段が高くても日本の機械を活用するのは、パナソニックと同様で、品質が高い、言わば Japan Quality をしっかりと保つためでもあるようです。ちなみにこの工場では1分に3台も車が出来ており、そのスピード感にも驚きました。様々な工夫を散見しましたが、これらの多くは日本から導入したのではなく、インドで独自に産み出されました。その中でも特に有益な工夫は、日本にも導入されているそうです。インド市場で長くリーディングカンパニーを務めながらもその地位に安住せずに様々な工夫をした結果、今の地位があるのだと改めて実感しました。

質疑応答の時間もとても白熱し、有益なお話を伺うことが出来ました。前述の30年前にインドに進出するきっかけになった話から暴動時のこと、今後の展望まで、忌憚なく話していただいていたのも有意義な時間でした。車1台走っていない村へ行き車をもつ「楽しさ」や「素晴らしさ」を伝えていくなど、圧倒的なトップシェアを獲得する企業として市場を新たにつくっていく試みは、まだ開拓されつくされていないインドにこれから参入していく企業のヒントになっていくかもしれません。

元はインド政府との合弁会社ということもあつてか、かなり現地化がすすんでおり、日本のよさとインドのよさの高次元での融合が実現された『海外進出の模範』を、五感を通して感じる事ができた意義深い工場見学でした。



4.政府機関訪問

文責：井上 ゆり絵

〈インド外務省〉

■迫力のある建築

ラージ・パト通り(Rajpath)というデリーの中心にある大きなストリートの西端に大統領官邸、東端にインド門があり、それらをつなぐ大きな道路の両脇に中央官庁があります。建築はインド・イスラーム様式と西洋建築の融合したコロニアル様式で、堂々とした風貌でした。建物の中も美しく、局長クラス以上の官僚には一人一部屋立派なオフィスが与えられるそうです。



■質疑応答



私たちは Aseem R Mahajan 在大阪・神戸インド総領事からご紹介いただいた東アジア課中国専門の Shilpak Ambule 氏のオフィスでお話を伺いました。初めに自己紹介と我々の団体についてご紹介をし、その後1時間程度の質疑応答がありました。事前の勉強会で準備をしていた質問に加え、これまでのツアーで新たに生まれた疑問を投げかけました。(対日経済外交について、対中外交と対日外交の比較、インド外交・モディ外交の軸、など) これまでの研究では、日本が求める対インド外交については詳しく学びましたが、インドが求める対日外交とは何なのか、ということが不明確であったので、インド政府側の立場を伺うことのできた貴重な機会でした。インドの非同盟主義はこれからも変わらないこと、インドが対日外交に求めるのは、他国と同様に経済的な協力に加え、よりハイレベルな政治・防衛での対話の促進であるというお話が印象的でした。

■運命の再開

Shilpak Ambule 氏との面会の後、外務省の正面玄関まで戻って来たところで奇跡が起きました。8月末に急遽決まったモディ首相の京都訪問の通訳兼学生スタッフとして、インド総領事館に8月27日から31日まで雇っていただきました。その際に一緒にお仕事をした外交官の Venkat 氏にばったりお会いしたのです。Venkat 氏も私たちの顔を覚えて下さっていました。そして、同じく京都訪問で学生にご指導して



下さった Vanlalvawna 氏のオフィスまで案内していただき面会させて頂きました。その後、省内のコーヒーハウスに連れて行っていただいて美味しいコーヒーとパコーラを御馳走になりました。さらに、アグラ行の列車やバスツアーを探して下さるなど、まさに至れり尽くせりでした。京都来日での学生スタッフの働きぶりや一生懸命おもてなしの姿勢が彼らの心を掴み、たった5日間ながら内容の濃い時間を共に過ごさせていただいたことで信頼関係が築けたからだ実感しました。外務省訪問後は、Venkat 氏に紹介していただいた地元で人気の大衆食堂でインド料理をたらふく食べました。



〈日本大使館〉

大使館では防衛省からの出向で赴任されている吉良様に案内していただき、初めに八木毅駐インド日本国特命全権大使を表敬し、その後中川勉政務公使からご講義を受けました。

■八木大使表敬

八木大使は温かく私たちを迎えて下さいました。応接間で半時間にわたり美味しい紅茶を飲みながら談笑しました。私たちの団体について紹介した後、八木大使のこれまでのキャリアや、モディ首相来日のインドでの報道の様子、今後期待される日印関係の行方についてお話を伺いました。今回の首相来日は日本国内でも非常に高い関心がありましたが、インドでも類まれにみる報道量で、大きな反響があったそうです。政治安全保障分野での更なる関係強化に加え、他国に比べまだまだ稀薄である人的交流や学术交流といった市民レベルでの関係強化において、日印協会学生会員としても一学生としても私たちの果たすべき役割が大きいことを認識しました。



■中川勉政務公使のご講義

その後は中川公使に目からうろこ落ちる講義をしていただきました。自己紹介の後、何のためにインドに来て、どんな問題意識を持っていて、何を得たいのか、次にどうつなげたいのかという

ことを各々問い詰められました。その中で、複雑怪奇なインドという国の捉え方、世界の見方、連続性、地政学で考える外交論などをご教授いただきました。特に印象に残ったのは以下の3点です。

① 世界の捉え方

世界を捉える際には、世界の連続性・連結性に着目して地政学的な観点から捉えるべきであり、そのためには歴史学に加え地理学を学ぶことが大切であるというお話を伺いました。さらに、陸地だけでなく海に視点を広げることが、特に海洋国家である日本の外交戦略には不可欠であることを教わりました。この視点がインドを考える上でも重要であり、なぜ首都がデリーなのか、なぜバラナシが古くから聖なる地として認識され、人の集まる場所となったのか、なぜタージマハルがアグラにあるのか、といった地理学から浮かぶ普遍的な疑問を探ることや、インドでは隣国とつながるルートとして陸路が発達した一方で海を面として捉える能力が欠けていたという事実からインドの発展の歴史を辿る面白さなど、複雑怪奇なインドという国を理解する上でのヒントを与えていただきました。今まで私たちはインド一国を眺めて研究をしてきましたが、今後は視点を広げ、インド以外に住むインド人やインドを取り巻く国際情勢の変化にも注目していきたいと思えます。

② 外交とは、プレゼンスとは

外交における「言葉」の重要性に関するお話も印象的でした。意味のある発言、相手に耳を傾けてもらえる発言力がプレゼンス（＝実態として影響を及ぼせるもの）であるということ、国連での日本の立場など具体的なエピソードを交えてお話いただきました。国際会議や首脳会談の成果を、成功したか失敗したか、条約が締結できたか否かなど、0 か 100 かで我々は考えがちですが、外交とは 50 : 50 を 60 : 40 にできるかどうかという勝負であるのだと、一つの出来事やそれについての報道の受け止め方についても新しい視点や本質の見抜き方を教わりました。さらに、外交カードである ODA をポジティブリンケージとして使うかネガティブリンケージとして使うか、といった外交における駆け引きの難しさや一国を背負う外交官の抱えるジレンマを、臨場感あふれるお話の中で感じ取ることができました。

③ 日本外交の軸

講義の後半では、日本外交のプライオリティについて、そしてその中でなぜインドが日本にとって大切なパートナーであるのか、さらに、外交における言葉の重要性について触れられた上で、先日のモディ首相来日の際に結ばれた「特別戦略的グローバルパートナーシップ」の意義についてお話を伺いました。日本にとって最重要視すべき国は、戦略的（ストラテジック）かつ普遍的価値観を共有する国であるというお話が印象的でした。日本にとってインドがこれほどまでに戦略的に重要なパートナーとなったのも、1998 年のインド核実験で最悪の関係に陥った二国間関係が 2001 年の 9.11 同時多発テロを機に新たな敵が浮上し、国際情勢が変化したことによって急速に発展したからであり、こうした二国間関係だけを見ては見えない事実があることや、インド以外の周辺国の変化から一国を見つめる視点が重要であるということ学びました。

5. トリパティ夫人との夕食会

文責：山下 渉

この度のインド訪問において、Shashi U. Tripathi 大使閣下（Former Secretary(West), Former Member of Union Public Service Commission、以下、Tripathi 夫人）のご自宅にご招待頂く栄誉を得ました。この訪問は、Tripathi 大使ご夫妻と阪本倉造氏の長年にわたる交友があつて、実現したものでありますが、Tripathi 夫人とは初めてお会いすることもあり、また要人の方のご自宅にご招待頂くという希有な経験の為、少し緊張しながら向かいました。そんな私達を Tripathi 夫人は温かく迎えてくださいました。慈悲深く、とても温かいお人柄に触れ、経験に基づく説得力のあるお話を拝聴し、とても美味しい Chai と伝統的なインドの家庭料理でおもてなし頂き、学生一同、大変有益な訪問となりました。



■ 外交官としての経験

Tripathi 夫人は、1970 年にインド外務省に入省して以来、30 年以上にわたり、外交官として国際社会の最前線でご活躍された方であり、私達のお伺いしたい事の大部分を占めていた事柄でもありました。Tripathi 夫人は、ご主人でもあります、故 Manilal Tripathi 元駐日インド大使（以下、Tripathi 大使）とは、入省同期であり、外交官としての若かりし頃を一緒に大使館、部局で共にご活躍された事、アメリカ同時多発テロの時に在ニューヨーク総領事として、ご尽力されたこと等をお話してくださいました。当時は、外交官カップルが珍しかったため、人事で配慮があり、在外公館勤務の時も一緒に辞令を受ける事が出来たとの事です。とてもユニークな試みだなと思いました。また、9.11 の時は、良い部下に恵まれて、行方不明になっているインド国民の発見（ワールドトレードセンターでは、多くのインド人が働かれていたそうです）に向けて、一丸となって尽力出来た事は悲痛な事件ではあったけど、外交官としてのキャリアにおいて思い出深い経験であると仰っていたのが印象に残りました。また、駐ポーランド大使、駐ジンバブエ高等弁務官、駐カナダ高等弁務官としても、インドと各国の関係発展のためにご尽力され、その後、Secretary(West)として、複数の国を管轄し、退官後は、政治任命で Union Public Service Commission の一員として、奉職されたそうです。

■Manilal Tripathi 元駐日インド大使が紡いだ日印友好

Tripathi 夫人のお話で、最も印象に残った話の一つが故 Manilal Tripathi 元駐日インド大使が在任中にご尽力された千手観音坐像再建に係る貢献です。観音正寺に鎮座していた重要文化財でもある旧千手観音像は、1993 年の本堂焼失の際に焼失してしまったそうです。しかし、原料であった白壇は、輸出禁制品であったため、造立が進まなかったそうです。そんな中、Tripathi 大使がインド政府に掛け合い、特例



として、23 トンの白壇が寄贈されることになり、現在の本尊である千手観音坐像が造立されたとのことでした。「Tripathi 大使は、すでに他界してしまいましたが、千手観音坐像が、Tripathi 大使が日印友好の架け橋となった証であり、誇りに思う」と話される Tripathi 夫人の姿がとても印象的でした。なお後日談ですが、帰国後観音正寺を訪れ、観音様を拝見させていただきました。総高 6.3 メートルにも及ぶ観音様は予想以上の迫力で、堂々と鎮座されていました。住職様が Tripathi 大使へのお経をあげられている間、インドでの出来事や Tripathi 夫人のお話を思い起こしていました。先人が築かれた関係を、私たち次の世代が引き継がなければと強く思わされました。



■人の繋がり

今回、Tripathi 夫人と夕食をともにさせて頂き、改めて人の繋がりについて、強く考えさせられました。今回、このような機会がセッティングされたのは、冒頭で述べた通りですが、大使館、外務省訪問等、スタディーツアーにおけるコンテンツの多くが、人の繋がりのお話を享受したものだと思います。それは先人達が積み重ね、発展させてきたものです。平林理事長によるメトロ事業、Tripathi 大使の白壇寄贈への尽力等がまさに良い例であり、実際に両国の発展や友好親睦に寄与している事が聞いて、見て、実感する事が出来ました。Tripathi 夫人も人の繋がり大切につき、仰っていたのが心に残りました。今回のスタディーツアーを通じて、知り合った方々との繋がりをしっかりメンテナンスし、大切にしていけることも、スタディーツアーをより意味のあるものにするため、そして日印関係に寄与する為にも大切な事なのだと感じる夜となりました。

6.インド人学生とのディスカッション

文責：木嶋 優斗

9月13日、YMCA Delhi の学生（正しくは来年度から YMCA に就職する訓練生）とのディスカッションを行いました。当初の予定では日本人6人とインド人6人で行うことになっていましたが、実際に集まったのは14人で、インド人優勢の議論が予想されました。このディスカッションに集まったメンバーはインド人の中でも極めて優秀な人材で、頭の回転が速いのはもちろん、ディスカッションに向けて準備してきたプレゼンテーションでは想像を遥かに上回る質の情報を提供してくれました。しかし、ディスカッション前にウォーミングアップとして行ったゲームでは、再三ルールを説明したにも関わらずそれを破ってしまう姿が目にし、勝つことへの執着の強さを垣間見ると同時に、インド人を統制する日本企業の苦勞の一端を見たのかもしれないと感じる瞬間でした。



■ディスカッション内容



ディスカッションは「インドにおける自殺問題」について行いました。渡航前に見た映画「3 idiots」の中でその問題が扱われており調べたところ、インドは日本に比べて自殺率こそ低いものの、若者の自殺や女性の自殺が社会問題になっていることが明らかになりました。そこで、日本から見ているだけでは理解できないインドの事情を、インド人とディスカッションをすることで学ぼうと考え、今回のディスカッションを行うに至りました。始めに両国の自殺問題の現状について代表者がプレゼンテーションを行いました。この時に行われたインド側のプレゼンテーションが圧巻で、たった10分のプレゼンテーション、1時間にも満たないディスカッションのために凄まじい準備をして臨んでくれました。ディスカッション自体は、3グループ（各グループ日本人2人インド人5人ほど）に分かれてインドの自殺の要因となる問題をひとつ挙げ、それに対する政策を考えるとといった形で進めました。議論の時間が30分弱しか無かったにも関わらずどのチームも結論に達することができたのは主催した者としても嬉しかったです。簡単にはありますが各チームの結論を紹介いたします。

まずAグループ（弊団体の井上、山下が所属）は、学生や児童の自殺を問題として挙げました。インドには日本以上の受験戦争があり、子供たちは日々過酷な受験勉強に苦しんでいる現状があり

ます。またインドの学校には部活動という習慣が少なく、息抜きをする余裕さえ与えられていません。そういった現状に希望をなくした上に逃げ出す場所も無い子供たちは自ら命を断つという悲しい選択をしてしまいます。そこで、彼らが結論として出した対策は、まず部活動の文化を学校に根付かせ、学生や児童が息抜きをできる場所を提供すること、そして、親や教育者に対する教育を行うというものでした。

次に B グループ（同水谷、藤井が所属）はインドの南部、農業地域における自殺問題について議論しました。農業従事者は異常気象や天災の影響を受けるため収入が安定せず、コミュニティ自体も狭いため生活に困窮し、頼るあても無くなり、自殺という選択をしてしまいます。それに対して、政府が気候の変動に対応できるようダムを建設すること、農業組合を作り生産者側が価格を決定する権利を与えること、を対策として挙げました。

最後に C グループ（同北條、木嶋が所属）は女性の自殺を考え、レイプ被害にあった女性がコミュニティからはじかれ、自殺に至るといった問題について議論を行いました。この問題に対して C グループは、加害者側の多くがアルコール依存症や酩酊状態であることから、アルコールの販売量や濃度に規制を設けること、また被害にあった女性をコミュニティから除外することがないようにコミュニティに対して学校で教育を施すことを挙げました。

どのグループも重複することなく問題を挙げそれぞれの結論を導くことができ、ディスカッション自体は成功に終わりました。

■国際人としての力

今回のディスカッションでは、インド人のパワーに圧倒されてしまった場面がいくつもありました。スタディーツアー全体を通じてもそうでしたが、インド人が持つ、目的を達成するために進む力は尊敬に値します。議論の中でも、自分に反対意見や新しい情報があると大きな声で主張し、議論を自分の方に持っていく場面が多くありました。（そのためしばしば全員の声が大きくなり収集がつかなくなることもありました。）このディスカッションでもインド人の議論が白熱して日本人が割って入れないという場面がありました。日本人6人は決して英語を話せない訳でもないのですが、その迫力に押され、主張を述べるのがままなりません。普段 SWADOM という研究会に属し、国際人を志すメンバーではありますが、そのような場面でも臆することなく自分の価値を發揮できる人材こそが国際社会で活躍することができるのだと気づかされた一日でした。



7.観光-アグラ、バラナシ

文責：水谷 亜香里

■インド人の「誇り」タージマハル

14日は、一日かけてアグラまで車で向かい、観光を楽しみました。タージマハルは、さすがは世界遺産、白の大理石に青い空、そしてインド人の色鮮やかな衣装が映える素晴らしい景色でした。タージマハルで驚いたのは、インド人の入場料が10ルピーなのに対して、外国人の入場料が750ルピーだということです。チケットを買うのにかかる時間、入場するまでの列、タージマハルの上に登る道すべてが、750ルピーの入場券は「High Value Ticket」として優遇されており、お金を持つものが強い、という現実を突きつけられているように感じました。

タージマハルは、22年もの月日をかけて、ムガル帝国の皇帝シャー・ジャハーンが愛する妻のために建てたと言われています。完璧な左右対称の建物は、誰も写真で見た事はあるかと思いますが、実物は筆舌に尽くしがたい迫力がありました。タージマハルの建物内部では、日のあたらない場所で多くのインド人観光客が腰を下ろしてヤムナー川を眺めていました。せかせかと歩き回って観光するよりも、ヤムナー川の流れのようにゆったりと時間を過ごし歴史を感じる方が、タージマハルをより味わえるのかもしれない。



■インドが混沌と言われる所以？聖なるガンジス川

デリーに9日間滞在した後、バラナシに向かいました。デリーとは全く違い、細く迷路のように入り組んだ道やたくさんの放し飼いにされた犬と牛、決して清潔とは言えない衛生環境に、最初は戸惑ってしまいました。道の両脇には路上にたくさんの野菜が並べて売られていて、その野菜を食べようとする牛に慌てている店主がいて、日本語を巧みに話す怪しい男が「ボクの友達のお店に会い」と誘ってきて、後ろからはクラクションを鳴らしながらバイクが追い抜いていく…四方八方から刺激が与えられ、「混沌」とはこういう状況を言うのか、とバラナシを訪れて初めて理解しました。



ガンジス川も、インドの混沌さの象徴の一つのように思いました。もし仮に日本に「聖なる川」と呼ばれる川があったとしたら、日本人はその川をどう扱うでしょうか。おそらく、他の川とは違う「別格」として祭り上げ、簡単には触れることのできない神聖不可侵のものとして扱うのではないのでしょうか。しかし、インド人はガンジス川で沐浴をするだけでなく、口をゆすぐこともあれば、洗濯をすることもあり、人を焼いた灰さえも流してしまいます。神聖であると同時に、人の生死、生活すべてが混ざり合ったのがガンジス川であり、混沌としたインドの風土を象徴しているように感じました。

夜は川べりでお祭りが行われます。5人の男性がオレンジ色の鮮やかな衣装に身を包み、同じ動きで儀式を行っていました。アコーディオンのような音楽をバックに、ベルを鳴らしたり、ロウソクを掲げたりしながら行われる儀式は幻想的で、昼の賑やかなバラナシとはひと味違った一面を見ることができました。



ガンジス川沿いにはかの有名な火葬場があります。あたりには薪が大量に積み上げられており、5,6カ所に分けて焚き木が行われていました。そこへ竹の担架に乗せられ、色鮮やかな布に包まれた遺体が持ち込まれます。ガンジス川の水に一度浸されてから焼かれているようでした。日本人にとって、「死」は「穢れ」であり、日常から遠ざけようとする風潮があります。しかし、インドの火葬場は非常に開けており、誰もが人の死をまざまざと直視することができます。立ち会っている遺族は決して感情的になっておらず、どこかあつけらかんと家族の死を受け入れているような印象を受けました。人間は必ず死ぬのだということ、私たち自身も少しずつ死に近づいているのだという当たり前の事実を改めて突きつけられた気持ちでした。遺体の灰を川に流してしまうのは、日本人にとっては理解しがたい部分もあるかもしれません。しかし、彼らは輪廻転生を信じているので遺体がガンジス川に流されたあとも、分解され、大地の一部となり、またいつかどこかで新しい生命として生まれ変わると信じています。「宗教の違いを理解することは重要だ」という言葉はよく耳にしますが、ガンジス川の火葬を見て、初めて具体的に、宗教の違いによる価値観の違いを意識することができました。

8.まとめ

文責：水谷 亜香里

■インド人の「本質」を垣間見る

今回のスタディーツアーの目的は、「飾られていないインドの現状を多角的に捉え、将来の日印関係・自分自身の成長に活かす」ということでした。「多角的に捉え」るために、スラム、日系企業、政府機関、学生という4つの要素をツアーに取り入れました。4つの全く異なった視点から見たインドは多くの顔を持っていて、それぞれの報告書にあるように多くのことを感じ、学び取ることが出来ました。しかし一方で、「インドとはどんな国か」という問いの答は未だ見つかっていません。13億人の人口を抱え、多くの言語や文化を持つ国を一言で形容することは不可能でしょう。

しかし、唯一共通して感じることは、インド人のお節介なまでの親切心と、人懐っこさでした。よく「インドで道を聞くと嘘を教えられる」「物を買うと現地の何倍もの値段をふっかけられる」と言われます。たしかに、旅の最中何度もそういった場面に遭遇し、時には不快に思うこともありました。しかし、インド人のその行動の奥には、「(たとえ不確かであっても)自分の知りうる限りの情報を教えてあげたい」という親切心や、値段を交渉していく会話の中で芽生える人と人の関わりを大切にする風習があることを学びました。表面上だけの親切さではなく、自分に何の得が無くとも、自分の持つ全てを提供しようとしてくれる「心からの温かさ」は、もしかしたら日本人以上の優しさなのかもしれません。これは、現地に行かなければ絶対に感じられなかったことで、今回のスタディーツアーの最大の収穫だと思います。

日本とインドはその国交の長さが示す通り、政治的に深い関係を築き上げてきました。しかし「日本人」にとって「インド人」はまだまだ遠い存在でもあります。地理的な要因ももちろんありますが、日本の街でインド人を見かける機会は中国や韓国に比べて殆どありません。また多くの日本人はインドの文化について尋ねられてもはっきりと答えることが出来ません。日本のアニメや漫画は世界的に人気がありますが、インドではほとんど浸透していないようでした。モディ首相の今回の訪日でも表れたように国同士は深い関係を築けているのにも関わらず、文化的・人的な交流はまだまだ不十分であるように思います。今回感じたインドの文化やインド人の姿をより多くの日本人に発信し、インドの深い理解を広めていくことが、間接的にも将来の日印関係をより深いものにするでしょう。

また、スラム訪問や学生間のディスカッション、アグラ・バラナシ観光等、実際の体験によって「ミクロ」のインドを感じられた一方、同時に大使館・外務省訪問や日系企業訪問を通して、インドを「マクロ」な目線でとらえている方々のお話を伺ったことで、旅行では味わえない、より多角的で重層的にインドを理解できたのではないかと考えています。そして、私達の団体は一人一人が将来的に国際舞台で活躍することを目標に活動しているため、官民間問わず、海外の第一線で働かれている方とお会いし、実際に現地でも感じたことを伺ったことで、自分の将来の理想像を構築する、よききっかけになったと感じています。

一度の訪問だけでは知り得ない部分も多くあります。もっとインドのことを理解するために、日本国内でも勉強を続けたいと思いますし、日本で出会えるインドの方々との交流も大切にしたいと

思っています。そこから得た知恵を次回インドに行った際には活かし、少しずつインドへの理解を深められたらと思っています。

■人脈と経験が繋がったスタディーツアー

今回のスタディーツアーは、中山太郎先生、Aseem R Mahajan 在大阪・神戸インド総領事、公益財団法人日印協会の平林博理事長先生、外務省南西アジア課の横手文徳様、モディ首相来日の際に出会ったインド外務省の方々など、今までお世話になってきた多くの方々の多大なご協力があったこそ、成し遂げられたのだと考えています。また、インドの訪問先では多くの日本人、インドの方々にお出迎えいただきました。お忙しい中私たちにお時間を割いて頂いたこと、学生の身分にも関わらず、このような貴重な経験の機会を与えていただいたことに、深く感謝申し上げます。

今の日印関係があるのは数えきれないほど多くの方の尽力あつてのことなのだというのを、このスタディーツアーを通して改めて強く感じました。私たちも学生、新社会人として、これからの両国間関係の発展に貢献できるよう、日々邁進したいと思います。

2014年10月3日

